「保証の品をください」（2024.5.19）

「秘跡は、神の恩恵を目に見える形で表した聖なる『しるし』である。」

（アウグスティヌス『神の国』より）

マタイ福音書 1 章にはイエス様の系図があり、その 3 節には「ユダはタマルによってベレツとゼラを、ベレツは・・・」と続く。タマルはユダの長男エルの嫁であり、その死後次男オナンの嫁になった女性である。詳しくは創世記 38 章を読んでほしいが、ユダは実家に帰していたタマルを娼婦と思い関係を持つが、その代価として子山羊一匹を約束する。ところがタマルはその約束が実現するまでの保証の品を求めたのである。そこでユダは自分の印章と杖を預ける。三か月ほどたって、タマルの姦淫を密告するものがあったが、保証の品を提示することで相手がユダであることが証明され、タマルは処罰を免れる。やがてタマルはペレツとゼラという双生児を出産し、イエス様の系図に連なったのである。

ユダとタマルの出来事を取り上げたのは、タマルが約束を保証する品を求め、その品がタマルを守ったという点である。私達はイエス様の十字架の御業によって罪赦され、神の子供とされている。そして永遠の命まで約束されている。感謝の内に信じているが、時として本当にそうかな？と疑う事もあるのではないでしょうか。慈しみ深いイエス様はそんな私たちのために、洗礼と聖餐をその保証として用意された、と示された。つまり、聖礼典は、すべての人に開かれている十字架の恵みが、私のため、あなたのためであるということを保証するため、その見えない恵みを見える形で表した聖なるしるしだということである。だから洗礼・聖餐において、主と結ばれる、主が現臨される、罪が完全に赦される、永遠の命にあずかる、神の子・神のものとされる、聖霊の場とされるなど見えない数々の恵みが固い決意を込めて約束され、保証されているのだ。

まさに上掲のアウグスティヌスの言葉のように、聖礼典はこうした見えない恵みの見えるしるしである。ユダとタマルの場合で言えば、保証の品としての印章と杖である。私達はこの聖礼典を見えない恵みの見える保証のしるしとして受け止め、この恵みに立ち、揺るがない確信をもって教会の営みを担いたい。